

御土あかし

第12号

発行 あきる野市教育委員会 東京都あきる野市三宮350 電話 042-558-1111 FAX 042-558-1560

下町に光りをさし入れた 熱血校長坂本龍之輔

あきる野市文化財保護審議会長 坂上 洋之

はじめに

滝山街道を八王子方面に向かって行くと、秋川に架かる秋留橋の少し手前右側の道端（牛沼83番地）に、小さな碑が建っています。明治から大正にかけて、東京下町に住む恵まれない境遇の子どもたちの教育に熱血を注いだ、郷土が誇る教育者坂本龍之輔（1870～1942）の碑です。坂本の教え子たちが、彼の生家の入り口に思慕の結晶として建てたのです。この小稿では、添田知直著『小説教育者』などを参考に、彼の生涯をたどってみようと思います。

添田（1902～1980）は後出の敬慕碑文を草したことでも知れるように、坂本の薫陶を受けた教え子の一人です。社会風刺や批判を歌に託して広く世に広めた演歌師添田啞蟬坊の息子で、新聞記者を経て作家になりました。

坂本をモデルにした『小説教育者』は、昭和19年度の新潮社文学賞を受賞しました。小説とはいうものの、添田の資料調査は綿密で、事実に基づく伝記小説としての価値が認められて、この賞が贈られたと言ってよいでしょう。

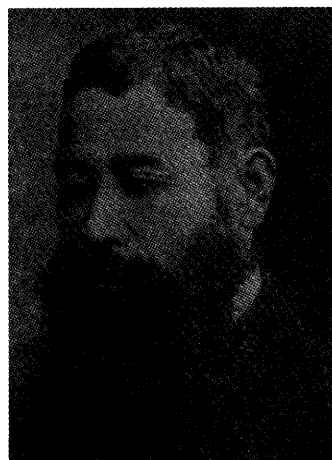
この小説は、戦時下の昭和18年から終戦直後の昭和21年にかけて、全4部作として刊行されました。添田は昭和16年頃から、晩年、生家の牛沼に隠棲していた坂本の元に死の直前まで通い、医師の制限による短時間の聞き取りを続け、また、坂本を知る人たちや、作中に

登場する人物にも可能な限り面会し、あるいは東京市視学の知人の指導援助の下に、学校関係の資料調査を重ねて書き上げました。

1. 生い立ち

坂本家は江戸時代に八王子千人同心を務めていました。明治維新後は、農業のかたわら染め物業も営んでいました。

坂本龍之輔は明治3年7月23日に、5人兄弟の3男に生まれました。幼いときから虚弱児で、食べ物の好き嫌いが激しく、父親の溺愛を受けて育ちました。



坂本龍之輔
（『町田教育百年史』より）

明治9年4月、現在の西秋留小学校の前身に当たる共和学校に入学、同15年に共和学校中等科を卒業した坂本は、高等科で学びながら助教として母校の教壇にも立って、小学生を教えました。この間、龍之輔が11歳の年に、父親が不慮の事故で急逝しています。

その頃、明治13年2月に神奈川県師範学校を卒業し

た下田宏が、同年12月に大済学舎（東秋留小学校の前身）に赴任してきました。以後、下田は大正12年に退職するまでのおよそ40年間のほとんどを東秋留小学校に勤務し、校長として学校経営に実績をあげました。当地方の幕末から明治期にかけての教育史に精通する溝口重郎氏の教示によれば、下田は明治14年に、西多摩郡下で初めて女兒のために裁縫科を設けるなどして女子の実務的教育の必要性を唱導したといえます。

下田はまた、子どもたちの向学心の養成にも努めました。昭和5年7月に東秋留小学校々庭に建立された下田宏先生頌徳碑にも「先生謹厳恬淡、名利二超越シテ專ヲ育英二樂ミ、畢生ノ心血全此二瀝ゲリ」とあるように、通学区内の適宜の場所に子どもたちを集めて、課外授業や夜学学習をさせました。

坂本も下田について漢籍や数学などの勉学に励み、やがて明治20年10月に、神奈川県師範学校を受験して合格します。ちなみに当時、多摩地区は神奈川県に属していました。在学中は寄宿舎生活で、4年間の勉学を終え、明治24年11月に卒業した坂本の最初の赴任地は西多摩郡でした。

2. 多摩での教員時代

卒業の翌12月、坂本は西多摩郡古里村の習文小学校（現古里小学校）に訓導兼校長として赴任しました。当時は西光寺というお寺の本堂を借りて授業をしていましたが、机は傷み、ふすまや障子の破れが酷い荒れた教場でした。坂本はまず、教室の清潔・整頓から始め、学校と家とで、子供たちの言動に表裏があってはならぬことを厳しく教えました。

また、通学区ごとに夜間の自習会をつくらせて自学自習を勧め、自らも草鞋履きで見廻りました。また、父母からのもてなしを一切受けませんでした。さらに、坂本の発案で村の共有林を学校財産とし、その利潤を保護者の教育費負担軽減に回すなどの優れた教育実践を展開しました。

足かけ3年の習文小学校勤務は、健康を害したために転地療養という形で終わり、その後、請われて南多摩郡町田村（現町田市）日新小学校、高座郡渋谷村（現藤沢市）渋谷小学校、南多摩郡南村（現町田市）開藤小学校を歴任し、真摯な教育活動・学校経営に努力しました。

31歳の秋に、その仕事ぶりを見込まれて、妻と子どもを伴って、明治33年10月、新しい任地の東京市に赴任しました。

3. 東京へ

坂本の東京での最初の赴任校は、下谷練屏小学校でした。かつては名声のある小学校でしたが、坂本が赴任した頃には当初の校威は衰え、気力に欠けた教員と、裕福な家庭の子女が多い割りには学力低下が著しく、その対策に腐心しました。

坂本が指導の主眼にしたのは、学力の向上と女生徒の華美な服装を改めさせることでした。近くにある博物館や動物園の見学を通じて、生き生きした学習活動を促すこともしました。添田によれば、坂本は他人から理屈屋、猪突、独善、不遜な人間と言われることが多いが、自身は唯々不正や不純を排する気概が人より強いためであると、自覚していたようです。

現実を的確に捉えて改善策を定め、先頭に立ってそれを実行し学校を変えていく坂本の存在は、行政当局にも広く知られてきました。

4. 学校新設

明治33年5月、後の大正天皇の結婚記念として、皇室から東京市に教育費として8万円が下賜されました。市ではこれを資金にして、貧困による不就学児童のための学校設立を計画しました。ところが、いざ具体的に事業を進めようとしても、国内・国外に参考になる施設がありません。やむを得ず東京市独自の設置案策定にとりかかり、知名な教育家などに諮ってみましたが、いずれも架空の理想論ばかりでした。そこで白羽の矢が坂本に向けられたというわけです。

翌34年春、推進役に任命された坂本は、早速、練屏小学校の勤務後の時間をスラム街の実態把握に当て、周辺を歩き回って、住民の暮らしぶりを入念に調べました。当時の東京の三大スラム街といえば、四谷鮫ヶ橋、芝新網町、下谷万年町をあげることができます。これらの地区に住む人々のほとんどは、人力車夫とか日雇いの仕事など、その日暮らしを送る極めて所得の低い人たちでした。ちなみに、その頃の代表的な交通手段の一つは人力車で、今のタクシーのように利用されていました。明治31年の時点で、東京の人力車夫数は4万人を越えていたといえます。

その日暮らしの親たちは、子どもの躰や勉強などは二の次で、8割強の子どもたちが学校に通ったことがなく放任され、奉公などに出され、家を離れて働かされ、あるいは弟妹の子守や親の手伝いなどをさせられていたの

です。

坂本は、毎朝東京市内の土木工事などに従事する労働者を親方がその場で雇う「入市」が立つ場所にも行ってみるなど、3カ月にわたってスラム街の探訪を続けた後、新しい学校設置の立案執筆にとりかかりました。その要旨は

- ①単に読み書きや計算を教えるばかりでなく、自主精神（独立・自活）の涵養が重要であるとし、そのために、勤労意欲と収入が得られる工場（作業場）を校内に付設する。
- ②児童の生活の大半が家庭生活である以上、父母の意識を変え、生活改善を促す方策を講じる。
- ③このような貧しい家庭の児童のための学校の存在は、それを必要としない社会が成立することで終わらせなければならないとし、その期限を30年に区切り、その間にスラムを無くす施政を行うこと。

これらの大綱に加えて、不潔な衣服や身体の清潔・保健のために理髪・沐浴施設の設置、父母会の定期開催なども盛り込まれています。

同34年7月に母校神奈川師範学校の旧師の計らいで、東京高等師範学校の嘱託教員に採用されました。さらに翌35年7月、東京市から麹町小学校訓導の辞令を受けて市役所教育課に勤務場所を替え、いよいよ特殊学校設立準備に取り掛かることになりました。

8月に入り、東京市直営の下谷万年小学校舎建築工事がスタートしました。坂本はこれと平行して新任職員と共に、学校周辺のスラム街にある家庭の未就学児童調査、及び就学督促に没頭します。

しかし、これがすこぶる困難な仕事で坂本たちを手古摺らせました。学校に通わせただけでは、口減らしのための住み込みの子守奉公や、親の稼ぎの手助けなどに子どもを使えない。だから学校に行かせたがらないのです。

また職員たちが長屋を回って聞き取りをしても、親子関係がややこしくてよくわからなかったり、生年月日が不明確だったり、通称でしか呼ばれていないので正式な名前が定かでないなど、さまざまな予期せぬ障害がありました。それでも、親の面接を重ねるなどの努力の後、ようやく就学予定児童名簿ができあがりました。

5. 多難山積の学校経営

明治35年10月、東京市万年尋常高等小学校訓導並び

に校長に任ずるという辞令が坂本に下り、翌36年2月に始業式、続いて3月10日に開校式が行われ、8割強は学校生活が初めてだという213名の児童と、5人の教員による万年小学校がスタートしたのです。

しかし前途は多難でした。家庭での基本的生活習慣というものがまるででたらめで、ぼろをまとった垢とシラミだらけの身体、眼病や耳疾の多い子どもたちを相手に、坂本は先生たちの先頭に立って悪戦苦闘を続けながら、粘り強く普通の小学校では考えられない独自の教育活動を展開していきました。

長い家庭での夏休みは、せつかく培ってきた学習指導の成果を無に帰せかねないとして、夏休みも子どもたちを登校させ、また夏休み日誌課題帳を作成して子どもたちに与えました。これなどは、現在一般化している夏休み学習帳の濫觴といわれています。

また忠孝など、子どもたちの現実の家庭環境と掛け離れている徳目の指導は、かえって逆効果を生むとして、教科書によらない修身授業を進めました。

学区や家庭の環境を考えたとき、子どもたちの心に潤いと豊かさを培うことが大切だということから、情操教育を重視して小動物の飼育や植物の栽培をさせました。

さらに、収入を得させることと教育との両得をねらった特別裁縫科・手工科を設けて、レース編みや染織の指導も行われました。

そのほか浴室の新設や、知恵遅れの子どものための特別学級の設置など、さまざまな教育活動や学校運営を行政当局に積極的に働きかけながら、かつ多くの障害を克服しながら推進していきました。

さらに学校へ行けなかった成人や、昼間の就労のために学校に通えないでいる子どもたちのための夜学部の開設も実現させました。

6. 引退

このように坂本龍之輔はおよそ20年間、東京の下町での教育実践に明け暮れてきましたが、大正10年5月、心臓病を患って退職し、牛沼の生家に帰り悠々自適の生活を送っていましたが、昭和17年3月26日に亡くなりました。享年73歳でした。

戦後の昭和32年に、かつて坂本が渾身の力を込めて育てた万年小学校の教え子たちが、浄財を募り、敬慕の結晶として前述の記念碑を建てました。その碑文には、次ぎのような文が刻まれています。



(表側)

「 敬慕 坂本龍之輔先生 龍生会

坂本先生は明治3年この地に生まれ、十三歳にして助教、師範卒後は古里村・南村等々の小学校長を歴任、のち教育史上没すべからざる東京市の特殊小学校事業の立案設計と、さらに難渋なその実践に身魂を打ち込まれた。小学校こそは人間形成の基礎工期なりとの信念に固く、小学教師として生涯を一貫し、昭和十七年七十三歳を以て、ここふるさとの風光裡に暝せられた。先生の創始にかかる下谷万年小学校出身有志の龍生会、ここに千万の思いをこめて、まずしくも先生追慕の碑をたてる。

昭和三十二年三月二十一日 」

(裏側)

「 龍先生愛誦句

一粒粟中蔵世界

龍生会一員 添田知直代書

八王子南新町 石直麻生直孝刻 」

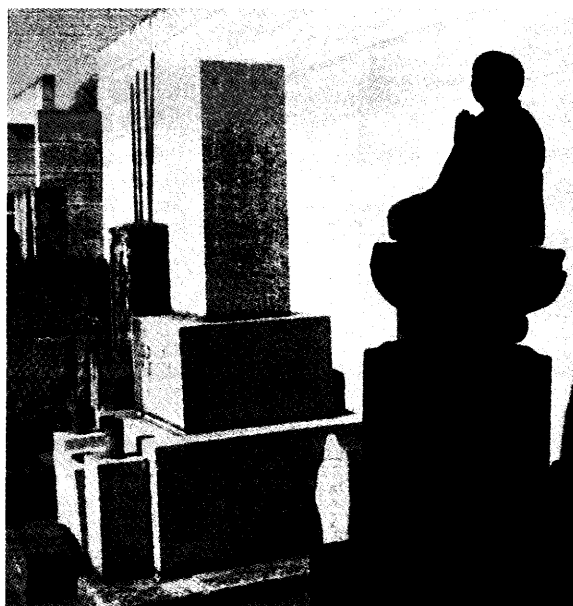
おわりに

坂本龍之輔の墓は、敬慕碑がある生家の裏（北）側にあります。そこは牛沼の福德禅寺の墓地で、先日、本稿に掲載するために墓の写真の撮りに行きましたが、なかなか見つかりません。

近くに大先学の中村 正さんがお住まいで、お訪ねして場所を聞き、中村家の墓地の一角にあるのを見つけたことができました。

なお、昭和32年に敬慕碑を建てた龍生会は、併せて蔵書数約3千冊の私設図書館も設置して、生家裏側の墓地に隣接する牛沼会館に収蔵し、活用を図りました。

およそ100年前、東京下町で奮闘した熱血校長坂本龍之輔も、わが郷土が誇る偉大な人物の一人であったといえるでしょう。



《参考文献》

- ◇添田知直著『小説教育者』（全4部）玉大出版刊
- ◇中村 正著『秋川流域人物伝』揺籃社刊
- ◇溝口重郎「市民カレッジ講座資料 あきる野の教育史」